The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	EPA介護福祉士候補者による日本語の専有 : 1年間のインタビューにもとづくケース・スタディ
Author(s)	藤原, 京佳
Citation	阪大日本語研究. 2017, 29, p. 129-158
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60631
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』29（2017）

EPA介護福祉士候補者による日本語の専有
―1年間のインタビューにもとづくケース・スタディ―

Appropriation of Japanese by an EPA care-worker candidate: A case study by a year-long monthly interviews

藤原 京佳
FUJIWARA Kyoka

キーワード：EPA介護福祉士候補者、日本語、専有、慣習的意味、主観的意味
シンボリックな主体

要約

EPA介護福祉士候補者の日本語能力をめぐる問題は個人の問題として扱われることが多かったが、第二言語教育研究では近年、言葉の意味は相互行為の参加者によってその都度変化するものとして捉えられるようになった。本稿では言葉の慣習的意味に加え主観的意味を込めることを「専有」と呼び、あるインドネシア出身のEPA介護福祉士候補者が就労現場で言葉をどのように専有しているのかを考察した。就労開始から収集した1年間のインタビューデータの分析の結果、協力者が用いる言葉には様々な思いや歴史が重ねられ、入居者の残存機能の維持、特定の入居者や職員との関係構築にもつながっていた。協力者は自らの日本語を「日本人みたいじゃない」、「言葉が出てこない」と考えていたが、協力者の日本語は誤用や逸脱ではなく、むしろ創造的な営みとして捉えられるべきである。

1. はじめに

1. 1. 研究背景

少子高齢化が進む中、特に介護分野においては労働力不足が深刻な問題となっており、外国人労働者の受け入れ拡大が議論されている。2015年3月6日の閣議決定には、①入国管理法に新たに「介護」という在留資格を設け、日本で介護福祉士の国家資格を取得した留学生など対し就労を認めることと、②技能実習制度の中に介護職を認め、技能実習生が介護職において実習することを可能にするという二つの案が盛り込まれ、2016年11月18日の衆議院本会議でいずれも可決されている。これにより今後、介護福祉士の資格を取得した外国人は介護従事者として日本に滞在することが可能になり、技能実習生も介護分野で実習できるようになるのであるが、介護職への外国人の参入はすでにEPA（経済連携協定）の枠組みにより開始されている[1)]。そこで、現在すでに日本の介護施設で就労するEPA介護福祉士候補者が職場でどのよう

な経験をしているのかを知ることは、近い将来同じように介護従事者として働く外国人を理解していく上でも大いに役立つと思われる。以上のような理由から、本研究ではEPA介護福祉士候補者が職場でどのような経験をしながら日本語を使用しているのかを探っていきたいと考える。

1. 2. EPAによる介護福祉士候補者の受け入れの概要

EPAとは外務省によると「貿易の自由化に加え、投資、人の移動、知的財産の保護や競争政策におけるルール作り、様々な分野での協力の要素等を含む、幅広い経済関係の強化を目的とする協定」とされ、2008年にインドネシア、翌2009年にはフィリピン、2014年にはベトナムから外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れが開始されている。送り出し国や受け入れ年度によって就労前の研修期間などが異なるが、本研究で対象とするインドネシア人介護福祉士候補者については、以下のような流れとなる。まず、介護福祉士候補者と施設のマッチングが斡旋業者により行われ契約が結ばれる。その後、インドネシアで6か月の来日前予備教育、日本で6か月の日本語研修を経て、施設で就労する。施設で3年間の実務経験を積んだのち、国家試験を受験し、合格すれば引き続き就労が可能となるが、不合格の場合、帰国となる。

しかし、こうしたEPA介護福祉士候補者受け入れの枠組みには批判も多く、制度もたびたび変更が加えられ現在に至っている[2)]。そういった批判の根本にあるのが、EPA介護福祉士候補者の日本語能力をめぐる問題であり、次章ではこの問題に関する先行研究を概観する。

2. 先行研究

2. 1. EPA介護福祉士候補者の日本語能力に関する研究

EPA看護師・介護福祉士候補者に関する調査・研究は2008年のインドネシアからの候補者受け入れ開始前後から日本語教育のみならず多岐にわたる分野で報告されている。それらの多くで言及される事項として「日本語の壁」があり、例えば介護福祉士候補者に関しては、就労現場における困難点として専門用語、方言（上野, 2012）のほか、敬語や文体の使い分け（遠藤, 2012）などがある。国家試験における問題では、漢字（中川, 2010; 三枝, 2012）や日常の業務に必要でない専門用語のほか、一般用語の中でも日本語能力試験の出題基準外の語彙が多く含まれていること（三枝, 前掲）などが指摘されている。国家試験に関しては、日本語教育学会の看護と介護のワーキンググループ（2010）によって作成された「介護福祉士国家試験問題の日本語の難しさについて考えるための基礎資料」が厚生労働省に提出され、2011年の国家試験から日本語の平易化や漢字へのルビふりなどの措置がとられるようになっている。

一方で、大関・奥村・神吉（2015）は国家試験をテーマとする研究に比べ、就労現場を扱う研究が少ないことを指摘している。管見の限りにおいても介護福祉士候補者に関する就労現場研究は、先に挙げた上野（2012）、遠藤（2012）のほか上野（2013）がある程度である。また、大関・奥村・神吉（2015）は、日本語そのもの、または外国人候補者の日本語の能力より、現場でどのようにコミュニケーションが行われているのかという視点の必要性を指摘している。しかしながら、上述したEPA介護福祉士候補者の就労現場を扱った研究は、やはりEPA介護福祉士候補者個人の言語能力に主眼がおかれ、その不十分なところが課題[3)]として提示されるという傾向にある。例えば、課題として頻繁に指摘される専門用語であれば、その用語を知っているか知らないかという知識の有無として扱われることになるのである。しかし、第二言語教育研究においては、このような知識の蓄積にかわる新たな学習に対する捉え方が現れてきており、次節ではこのような学習観の変化について取り上げたい。

2. 2. 第二言語教育研究における学習観の変化

第二言語教育において学習とは、文法規則や語彙、音韻体系を頭の中に蓄積していくこととして個人の中で完結する行為、言い換えれば知識を「習得」する行為だと長く考えられてきた。また、その行為者は「学習者」と呼ばれ固定した存在としてみなされてきた。このような考え方の前提にあるのが情報伝達としてのコミュニケーション観であり、そこでは送り手と受け手は情報をコード化する手順を熟知している必要がある。このコード化の方法や手順が文法や語彙、音韻体系になるのであるが、情報そのもの、すなわち意味は不変であり、自明のものとされてきた。しかし、Block（2003）によると、90年代以降、第二言語教育研究においては研究の本質や研究者の立ち位置といった存在論や認識論への問い直しが行われ、第二言語学習を個人だけでなく、個人がおかれる文脈といった社会的側面からも捉えようとする研究（van Lier, 1994; Block, 1996; Lantolf, 1996）が現れるようになる。中でも第二言語教育研究に与える影響が大きかったのがFirth and Wagner（1997）であり（Block, 2003; Zuengler & Miller, 2006）、彼らはそれまでの第二言語教育研究を批判的に検証し、意味は個人の頭の中で処理される現象ではなく、様々な文脈で行われる他者との相互行為によって生成されるものだと指摘した。このような言葉の意味の変容性について、Hall（1995）は、われわれが言葉を通して行うやりとりには慣習的意味として共有されたものがあり、それはバフチン（1988）が提唱した「ジャンル」によってもたされるものであるという。ジャンルとは発話の特定の型ともいえ、人々によって繰り返し使用されることによって形成されてきたものである。一方で、こういった慣習的意味に沿うだけでない主観的意味ともいえるものもわれわれは相互行為において付加しているという。人はジェンダー、社会階層、宗教、職業など多様な集団に属する個人と

して相互行為に従事し、その都度その多様な顔を持ち込み、慣習的意味にとどまらない新たな意味を生成しているのである（Hall、前掲）。また、Kramsch（1993）も、言葉を学ぶことは社会的な声と個人的な声を発することを学ぶことだとしている。社会的な声とは特定のスピーチコミュニティへの社会化であり、個人的な声とは主観的意味を表現するリテラシーを獲得することである。すなわち、言葉は二つの点でシンボリックであり、社会的な声というスピーチコミュニティの社会的・心理的現実を表象するものである一方、個人的な声という話者の主観的現実を表象するものでもあるのである（Kramsch, 2009）。Kramsch,（前掲）によると、主観的現実を表象する言葉は、現実世界の人や事物だけでなく話者の認識や態度、感情、価値観を表象するものでもあり、その言葉によって呼び起こされる記憶や期待なども含まれる。つまり、「今、ここ」にとどまらない、記憶といった過去や、期待や想像という時間の広がりと歴史性をもったものとして捉えられ、自分が何者であるかという話者の認識を構築するものとなるのである。Kramsch（前掲）はこのような言葉によって構築されるシンボリックな自己に関する認識を「主体（subject）」と呼んでいる。第二言語を用いることは、話者が第二言語のスピーチコミュニティの慣習とは異なる現実を構築することを可能にし、それまでとは異なる新たな主体を生じさせることも可能になるという。さらに、選択する言語やコードによって多様な主体を構築することもできるとしている。

こうしたFirth and Wagner（1997）やHall（1995）、Kramsch（1993, 2009）といった新たな潮流の理論的基盤の一つにとなったのが社会文化理論である。社会文化理論とは心理学においてヴィゴツキー学派を中心に発展したもので、端的にいうと人を社会から乖離させずに捉えるという特徴をもつ（石黒, 2004）。したがって、このアプローチにおける学習とは個人の内部で完結する行為ではなく、他者と行う社会的実践として理解される。Vygotsky（1978）によると、人の精神活動は歴史的に用いられてきた人工物を使用しながら、ある文化のメンバーとの相互行為に従事することにより行われるとされる。人工物には物理的道具とシンボリックな道具があるが、シンボリックな道具の代表的なものが言葉であり、われわれは言葉を通して世界との関係を認識しているという。そして、こういった歴史的に他者によって用いられてきた媒介物を「専有」することこそが社会的経験の獲得としての学習であると考えられている（石黒, 2004）。専有とは、石黒（前掲）によると、マルクスの言葉から来ており、「わがものとすること」（p.7）とされる。人が対象に対して抱く意味は対象にあるのではなく、対象に対する能動的な働きかけの中から生まれるものであり、専有とはその意味を自分のものとすることだとされている。ワーチ（2002）もまた、専有を自分のものにすることとし、バフチンを引用しながら「話者がその言葉の中に自分の志向とアクセントを住まわせ、言葉を支配し、言葉を自己の意味と表現の志向性に吸収」（バフチン, 1979: 66）することだとしている。さらにワー

チは、専有を習得と対比する形で説明しており、習得とは「媒介手段をすらすらと使用する」（ワーチ, 2002: 55）ことであるとしている。ワーチは両者についてGamoran（1990）にある、アメリカのキリスト教徒でないユダヤ人の子どもたちが、公立学校で歌われるクリスマスソングをイエスのところにさしかかった時に歌うのをやめたという事例をとりあげ、次のように解説している。子どもたちは歌詞をよく知っているという点ではそれを習得しているが、「習得された歌詞が行為者が自己同一化し、喜んで借り入れようとするようになって」（ワーチ, 前掲: 64）いないという点で自分のものとして専有していないというのである。石黒（2004）とワーチ（2002）の主張から、専有とは他者との社会的な実践に参加する中で意味を自分のものとしていくことだと解釈できるが、ワーチ（前掲）の「自己同一化」という表現に見られるように、単に言葉を使用するだけでなく、使用する人そのものを巻き込む複雑な過程であることがわかる。

2. 3. 本研究の目的

これまでEPA介護福祉士候補者の就労現場を扱った研究では、日本語の学習は固定された意味をもつ言葉を個人が習得していくこととして議論されることが多かった。一方で、第二言語教育研究では近年、言葉は他者と従事する相互行為で用いられることによって、はじめてその意味が生成されるものだと捉えられるようになってきた。言い換えるなら、相互行為とは言葉のルールによって進行する予測可能な場としてあるのではなく、様々な思いが交錯する不確かな場として捉えられるようになったといえる。このことをEPA介護福祉士候補者に当てはめて考えると、適切な場面で適切な文法と語彙を用いることのみが重視されるべきなのではなく、特定の入居者や職員に向き合った際に自分がどのような者としてあるのかということ、そして、そこで生じる気持ちを相手との間で定位することで自分なりの意味を見出していくことこそが重要になるのではないか。本研究ではこのような言葉の意味の生成を「専有」（石黒, 2004; ワーチ ,2002）という概念によって捉え、あるEPA介護福祉士候補者が就労現場となる施設でどのように言葉を専有しているのかを探ることを目的とする。

3. 本研究の方法論

3. 1. ケース・スタディ

本研究では方法論としてケース・スタディを用いる。ケース・スタディとは、ある現象あるいは個人、集団、制度、地域社会といった社会的単位の集約的な記述と分析である（メリアム＆シンプソン, 2010）。イン（1996）はケース・スタディが適しているのは、「どのように」、「な

ぜ」という問題が提示されている場合、研究者が事象をほとんど制御できない場合、現実の文脈における現在の現象に焦点がある場合であるとしている。本研究では、EPA介護福祉士候補者がどのように言葉を専有しているのかという問いを掲げ、現実の就労の場である施設におけるEPA介護福祉士候補者による言葉の意味づけという現象に関心をおいている。したがって、イン（前掲）が指摘する問いの形態と研究者が統制できない現実の事象への関心という点で、ケース・スタディは最も適した研究方法であるといえる。

3. 2. インタビューによるデータ収集

本研究は専有という概念を用い、ある EPA 介護福祉士候補者の慣習的意味にとどまらない主観的意味を理解することを目的としており、専有された言葉はそれを用いる人のシンボリックな主体を構築するという点で、言葉と人は分かちがたく結びついているという立場にある。したがって、就労現場における協力者の発話を忠実に取り出し分析するだけでは本研究の目的は果たせない。つまり、相互行為の場で何が起こったかではなく、相互行為における事態を協力者がどう捉えているのかを知ることこそが、専有という営みを理解する手がかりとなる。このような言葉の使い手が生きる世界の探求は、言語使用と言語能力に対する関心からのシフトとして、言葉とアイデンティティに関する研究を中心に発展してきた（Block, 2007）。ここでいうアイデンティとはポスト構造主義にもとづく概念で、固定した自己概念ではなく他者との間で言葉によって構築・交渉される社会的なものとして捉えられている。Pavlenko（2001）はアイデンティティのような私的で個人的な領域の探求は個人の語りを通してしか達成できないとし、Pavlenko and Blackledge（2004）は語りは語り手の過去、現在、未来という歴史的側面からアイデンティティを捉えることを可能にすると述べている。このようなアイデンティティ観は、本研究が関心をおく「今、ここ」にとどまらない歴史性をもった言葉によって構築されるシンボリックな主体（Kramsch, 2009）と重なると考えられる。そこで本研究では、あえてフィールドワークは行わず、協力者へのインタビューによってデータを収集した。しかし、語るという行為は聞き手を必要とし、意味は話し手と聞き手という二者の関係性によって創り上げられる（ガーゲン , 2004）。つまり、聞き手の存在は否応なく語りに影響を与えるのである。桜井（2005）は語りについて、「〈語られたことwhats〉である〈物語世界〉と〈語り方hows〉としての〈ストーリーの領域〉」（p.43）があり、後者のストーリー領域は語り手と聞き手の社会関係を表すものだとしている。その上で、物語世界とストーリー領域は構築する主体が異なるとし、物語世界を構築する主たる主導権は語り手にあり、ストーリー領域では語り手と聞き手の相互性が主となるという。本研究では語りのこうした二つの側面に留意し、語り手の引用を多く取り入れて物語世界を描きつつ、語り方としてのストーリー領域における聞き手の影響

も再帰的に捉えるよう努める。

4. 調査概要

4. 1. 調査協力者

本研究の調査協力者はEPA介護福祉士候補者のマワールさん[4]というインドネシア出身の女性である。調査開始当時23歳であった。マワールさんはインドネシアで来日前の予備教育を6か月、来日後さらに6か月日本語研修を受け、西日本のある特別養護老人ホームで働いている。筆者がマワールさんと知り合ったのは来日後の日本語研修であり、筆者はマワールさんのクラスで日本語講師をしていた。研修も終わりに近づく頃、筆者はクラスの候補者と個別面談をする機会があった。多くの候補者たちが就労に関する不安を口にする中、マワールさんは施設の入居者さんを自分の両親だと思ってがんばりますと泣きながら話してくれた。ほかの候補者同様日本で働く不安は非常に大きかったと思うが、まだ見ぬ施設の人を両親だと思ってがんばるつもりだという言葉は筆者には覚悟のようにも聞こえた。そして実際の就労の場でその言葉は何を意味するのかに興味をもつようになり、マワールさんに調査協力を依頼した。

4. 2. データ収集および分析方法

マワールさんは来日後の日本語研修を12月下旬に終え、直後に就労を開始している[5]。データはその翌年1月から同年12月までの1年間インタビューにより収集した。インタビューは約1か月に1回行い、追加インタビューと合わせて計13回行ったが、筆者の居住地とマワールさんの就労地および居住地はかなり離れていたため、筆者がマワールさんの住む土地へ赴き対面で行った3回を除いては、スカイプによって行った。インタビューの実施の詳細については表1に示す。インタビューはマワールさんの承諾を得た上で、スカイプのインタビューはパソコンの録音ソフトとICレコーダーに、対面インタビューはICレコーダーに録音し、逐字的に文字化した。このほか、インタビュー時の様子などを書いたフィールドノーツもデータとしている。

インタビューは 半構造化インタビューにより日本語で行ったが、単語単位で英語やインドネシア語の使用もあった。初回の質問は「国で看護について勉強しようと思ったのはなぜか」「EPAに応募しようと思ったのはなぜか」、「施設に入居者や職員は何人いるか」、「今どんな仕事をしているか」、「仕事で困ったことやうれしかったことなどがあるか」、「入居者や職員とどんな話をしたか」、「話をしてどう思ったか」、「日本語の勉強の時間があるか」などである。その後は前月に語られた内容について明確化を求める質問や、その後の進捗に関するものが中心

となっている。調査開始当初は仕事内容や新しい環境について思うところなどが中心であったが、調査が進むにつれ特定の入居者や職員との間で起きた出来事などが語られるようになり、筆者の質問もそういった出来事に焦点化されるようになった。具体的には、仕事内容、職員、入居者、日本語学習という項目を立て、前月から何か変わったことはないか質問した。しかし、インタビューは必ずしも質問項目に沿って行われているわけではなく、できるだけマワールさんに自由に語ってもらえるようにした。

文字化データは、まず、出来事を時系列に並べ、語りの中に表れた入居者や職員との間で用いられた言葉を取り出していった。次に、それらの言葉が出来事や他の語りとどのようにかかわっているのかを検討しながら、マワールさんにとってそれらの言葉がどのような意味をもつのかについて考えていった。取り出した言葉のうち、他の語りなどとの因果関係の中でマワールさんにとっての意味が見いだされた言葉を専有された言葉とし、各月ごとにストーリーを構成していった。ストーリーの月はインタビューの実施日ではなく実施回で区切っている。例えば、表1にあるように5回目のインタビューは6月5日に実施しているが、ストーリーでは5月として記述している。ストーリーの記述については、文法的に不正確であっても内容がわかればマワールさんの語りをそのまま使っている。「　」を使った筆者の文献からの引用や強調と区別するため、マワールさんの引用は「　」でくくり、ゴシック体で示している。マワールさんの引用内の（　）は筆者による補足である。またマワールさんの引用には「先生」という言葉が出てくるが、これは筆者のことで、「x」は聞き取れなかった音を表す。

表1　インタビューの実施の詳細[6)]

回	日	時間	形態	回	日	時間	形態
1	1月22日	1時間47分	ス	8	8月31日	2時間00分	ス
2	2月16日	2時間01分	対	9	9月18日	1時間59分	対
3	3月21日	2時間25分	ス	10	10月23日	1時間06分	ス
4	4月29日	1時間44分	ス	11	11月28日	1時間53分	ス
5	6月5日	1時間32分	ス	12	12月29日	2時間15分	対
6	7月1日	1時間33分	ス	13	翌年2月23日	1時間07分	ス
7	8月8日	2時間03分	ス	合計13回　24時間24分			

注）「ス」はスカイプ、「対」は対面を表す。

5. マワールさん

マワールさんは日本に来る前にインドネシアの看護学校で3年間学んだ。看護師になろうと

思ったのは、「**高校生のとき**」「**肝臓**」の病気で母親が「**よく入院して**」いて、そこで出会った看護師を「**優しくてきれい**」だと思ったのがきっかけだった。看護師は「**白い服を着てい**」て、患者の家族であるマワールさんが「**歩いている**」ときにも「**ちゃんと**」「**声かけ**」してくれた。また、看護師になれば母が「**お年寄りになったら**」「**お世話**」もできると考えるようになった。EPAへ応募したのはマワールさんの大学は日本の介護施設などと「channel」があり、マワールさんはそれを「**使ったほうがいい**」と思ったからだった。両親も日本に行くことについて「**自分で決めたら大丈夫です**」と言ってくれ、マワールさんは「**自分で決めました**」という。3年生のときには大学で6か月ほど日本語も勉強し、卒業後、介護福祉士候補者に応募する。その後、受け入れ機関とのマッチングが行われ、マワールさんは西日本のある介護施設を経営する法人と契約する。そしてインドネシアと日本で各6か月、計1年の研修を経て、12月末から法人が経営する介護施設の一つである特別養護老人ホーム「**ひまわり**」で働き始める。

マワールさんが働く「**ひまわり**」はユニット型の介護施設で、「**水町**」、「**空町**」、「**光町**」、「**緑町**」という4つのユニットがあり、マワールさんは水町で働いている。水町の入居者は9人、職員は日本人2人とインドネシア人3人の5人で、リーダーの塚本さん、野田さん、EPAインドネシア人介護福祉士候補者の先輩のフェントリさんとティカさん、そしてマワールさんがいる。ティカさんはマワールさんの大学の先輩だが、知り合ったのはこの施設に来てからだ。リーダーの塚本さんは男性で、それ以外は全員女性である。

5. 1. マワールさんの1年

1月

「**ひまわり**」に来て、マワールさんはまず「**9時から6時まで**」の「**日勤**」で働くようになる。朝、施設に行くと、まず「**挨拶し**」、朝ごはんの「**食介（食事介助）**」をする。そして10時ごろから「**バイタル**[7)]」を測る。10時半から11時半は入居者[8)]の「**トイレ介助**」がある。「**利用者さんはしっかり立てない**」人もいて、「**危ない**」のでトイレ介助は「**リーダー**」や「**先輩に**」「**見てもらい**」ながらしている。その後、昼ごはんを準備し、昼ごはんの食事介助をしながら「**一緒に**」自分も「**弁当**」を食べる。午後1時からまた「**おむつ交換**」や「**トイレ介助**」をし、「**時間があったら**」「**シーツ交換**」もする。2時半からはおやつを準備し、3時におやつを渡す。そして「**4時からまたトイレ介助**」をする。それが終わると、晩ごはんを温めて準備する。「**毎日この状態**」が続く。このほかにも1週間に1回はそれぞれの入居者の部屋を「**掃除**」し、1週間に2回入居者はお風呂に入ることになっているので、「**お風呂介助**」もする。マワールさんはイスラム教徒で、仕事の合間には「**お祈り**」の時間ももらっている。

マワールさんは仕事に「**まだ慣れていません**」と感じており、「**少し間違いがあったら**」、リー

ダーの塚本さんは「**わたしに怒ります**」という。例えば、マワールさんが入居者の食事を「**ミキサーで混ぜ**」ても、「**あまり小さくならないとき**」だ。塚本さんは「**声が強い**」し「**こわい**」。そんな時マワールさんは「**わたしがやったことは悪いこと**」だと思って悪い気分になり、ときどき「**仕事、帰ってから、部屋に泣きます**」という。初回インタビューの時も塚本さんについて話すときマワールさんは少し泣いていた。しかし、「**リーダーさんの言ったことは**」「**利用者さんに（とって）大事**」だということも「**わかります**」という。

入居者の中に「**西さん**」という「**80歳ぐらい**」の女性がいる。西さんは「**認知症**」だが、「**不穏**」な状態になると「**帰りたい**」と言ったりする。そんな時は「**ちょっとお待ちくださいね**」と返事したりしているが、こういう時は「**難しい**」。しかし、不穏でないときは「**おもしろい**」。水町で「**しっかりおしゃべりする**」のは「**二人**」で、そのうちの一人が西さんである。西さんはマワールさんの質問にも「**すぐ返事し**」てくれ話が「**続きます**」という。また、西さんは「**テレビの番組**」を見て歌ったり、「**ときどき冗談**」を言ったりもする。

2月

1月は日勤が多かったのだが、2月は遅出が多かった。遅出は1時から10時の勤務で、仕事は「**寝る前に口腔ケア**」などがあるが日勤と「**だいたい同じ**」である。2月になってマワールさんは塚本さんが「**優しくな**」ってきたと感じるようになる。それは自分が仕事について「**だんだんわかる**」ようになったからだと思っていた。ところが、その塚本さんは3月から水町を離れ「**事務所の人**」になり、もう一人の日本人職員である野田さんが新しいリーダーになることが決まっていた。しかし、マワールさんは野田さんより「**今の（リーダー）のほうがいい**」と思っていた。今のリーダーは「**ナースコールがあったら、すぐ、あ、部屋に行きます**」が、野田さんはナースコールが鳴っても「**携帯電話見て、何も、何も、体動かしません**」、「**ずっと座っています**」という。ほかの職員が忙しくしているのに「**この人はどうして何もしませんか**」、「**もしリーダーになったら、あの、水町はどうなりましたか**」と思っていた。そして、マワールさんは「**仕事は、いろいろな仕事が、あっ、ありますから、でも、うーん、しょ、しょく、介護職員は、あー、4人、4人しか、あり、いません、3人**[9]**しかいません、先生、仕事は、大変だと思います**」と仕事が多いわりに、職員が3、4人しかおらず、大変だと感じていた。

入居者の西さんは「**不穏があったら、先輩によると、皿**」を「**パーン**」と投げたりすることもあり、西さんの皿と茶碗だけは「**プラスチック**」製である。西さんは「**おもしろい人ですが、ときどき、ふお、不穏、不穏があったら、こわいと思います**」といい、そんな時は「**何をしたほうがいいですか、まだ**」わからないそうだ。

3月

野田さんが新しいリーダーになった。しかしリーダーになってみると、野田さんは「**変わりました**」とマワールさんは感じていた。前は「**たぶん熱い**」からかお風呂介助に「**嫌な感じ**」を持っているようだったが、今はよくしているという。ただ、遅出勤務がマワールさんは「**5回**」、フェントリさんは「**10回**」なのに対し、野田さんは夜勤があるものの「**3回**」で、勤務表に「**バランスがない**」と感じていた。実は、マワールさんはこの月それまでほかの職員に「**同伴**」されてしていた勤務を初めて自分一人だけでするようになっていた。午後1時から10時までの遅出勤務のうち6時から10時までを一人で勤務していたのである。マワールさんは「**遅出は大変だと思います**」と話す。「**洗い物**」をしたり、「**洗面所を洗って**」「**リビングの所を片づけ**」たりといったことを「**一人で**」しなければならないからだ。またこの月、新しく「**北川さん**」という女性の日本人職員が加わった。しかし、4月から今度は先輩のフェントリさんが系列の別の施設へ異動となり、水町のインドネシア人はティカさんとマワールさんの二人だけになってしまう。マワールさんは4月からは「**ほんとに一人で**」しないといけないと思っていた。

入居者の西さんについてマワールさんは「**最近**」「**不穏がひどくなりました**」と感じていた。「**幻覚**」もあるようだった。ある時、西さんによるとマワールさんは西さんの子どもにお金を貸したことになっていて、「**いくらぐらい、教えて**」、「**あなたが困りますよ**」と言われたことがあった。マワールさんは何のことか「**わかりません**」し「**怒りたい**」気持ちになったが、「**わたしの心は仕事よって**」言い、「**我慢**」したのだという。そして「**西さん、また教えますよ、わたし仕事やけんなー**」と答えると、西さんは「**わかります。ごめんなさいね**」と言ったという。西さんが不穏なときは、仕事が「**バラバラ**」して大変だ。西さんの話は「**テレビ、またテレビテレビ**」で「**変わりません**」し同じ話ばかりなのだが、認知症だからそういうことがあるということも「**わかっています**」し、西さんと話すのは「**楽しいと思います**」と語っている。

マワールさんが高校のとき出会った看護師の話をしたあと、筆者は今は介護の仕事をしているが、どんな介護士になりたいかと聞いてみた。すると、マワールさんは「**親切な人**」になりたいと答えた。「**患者さん**」や「**患者さんの家族**」を「**親切に見てあげ**」たいというのである。また、マワールさんは国家試験に「**合格したら、あの、必ず、つづ、働い、働いています**」と合格後続けて働きたいと思っているが「**結婚したい**」気持ちもあり、「**ずっとじゃなくて**」、「**何年か**」だけだと考えている。

4月

先輩のフェントリさんが異動し、4月から新たに午前9時から午後3時まで働く日本人のパート職員の女性[10)]が加わった。水町はリーダーの野田さん、3月に入った北川さん、パート職員、

EPAのティカさん、マワールさんの5人になったが、北川さんは病気で入院してしまい、北川さんが復帰する4月末までは4人の状態だった。マワールさんは半日勤務も入れて「**4月12日から23日まで**」の間全く休みが取れず、休みだった予定も仕事に変わってしまった。この月インタビューした際も、翌日は午後3時まで施設が提供する日本語の勉強をしたあと遅出勤務で10時まで働き、その次の日はすぐ朝7時の早出勤務という状態だった。マワールさんは「**えらいわ**」と少し笑って言った。またこの時期、マワールさんは早出、日勤、遅出と夜勤以外の勤務は全て経験するようになっていた。しかし、お風呂介助だけはほかの職員に「**見守り**」をしてもらいながらしていた。水町で働く5人の中でおふろ介助が一人でできるのは、「**先輩とリーダーさんだけ**」である。その「**二人だけ**」でお風呂介助することをマワールさんは「**えらいかなと思って**」いて、自分ができるようになるのが「**早ければ早いほどいい**」と感じていた。

マワールさんは自分の勤務状況や、お風呂介助を野田さんとティカさんの二人だけですることを「**えらい**」と表現しており、どうやってその言葉を知ったのか聞いてみた。ある時、入居者が「**誤嚥**」したときに、日本人の職員が「**えらいね**」と言い、入居者も「**えらいよー**」と言ったのを聞いて、「**えー？**」、「**えらいというのは、意味は、いいことじゃないですか**」と思って、先輩に聞いたのだという。すると先輩は、「**えらい**」は「**大変、同じ意味って**」教えてくれたのだという。そして、「**悪いこと**」にも使うのだと知ったといい、日本語は「**ほんとに難しい、えらい、えらい**」とマワールさんは笑いながら話してくれた。

5月

マワールさんは「**ミーティング**」のとき、リーダーの野田さんにお風呂介助について「**一人で（して）も、もう大丈夫かな**」と聞くと、「**リーダーさんはもう大丈夫ですよー**」と言ってくれ、先輩のティカさんも自分が見ても「**いい**」と思うと言ってくれた。マワールさんは「**全部の（ことが）、一人で**」できることが「**うれしい**」と思ったという。トイレ介助やほかの仕事はもうできるようになったが、「**お風呂は一番大変**」で「**最後のことは、お風呂**」と最後までできなかった仕事だった。

施設に来てもう5か月たつが、マワールさんは「**仕事のこと話すときは、まだまだ**」だという。「**パートの人**」や「**ほかの職員**」と「**入居者さんの状態**」について話すとき、「**新しい言葉、で、出て、それはなに？**」と思うこともある。その時は「**必ず、先輩に聞いて、xx、意味は何ですか、インドネシア語で、フフ、何？、いつも聞いて**」いる。

6月

働き始めて「**6か月ぐらい**」たつとマワールさんは「**全部、一人でします**」、「**今はもう全然**

教えてもらいません」という状態になっていた。しかし、その分仕事も大変になり、特に6月はリーダーと先輩のティカさんの二人ともが「**国家試験を受ける前に**」「**研修があって**」休む日が多かった。そして、「**ユニット、ちょっと問題がありました**」という。土曜日マワールさんは早出で午前7時から働いていた。「**いつも（なら）、9時から日勤の人、来**」るが、その日はリーダーもティカさんも研修で、「**パートの人も**」「**土曜日だから**」休みだった。そのため「**7時から1時まで**」「**一人で（仕事を）しました**」という。1時から北川さんが遅出で来ることになっていた。「**朝のケア**」では入居者の山本さんの便が「**3日、2日間、出てない状態**」だったので、看護師からの指示のもと「**ラキソ**[11)]」を飲んでもらった。1時に北川さんが来ると「**申し送り**」をしたが、1時半には山本さんの家族が来て、北川さんはその対応をしていた。家族が帰ると、北川さんは「**山本さんは排便、何時から出ました**」と聞いた。「**声が大きい**」し、「**怒るみたい**」だった。マワールさんが「**9時ぐらい**」と答えると、今度は「**山本さんの服、逆、知っていますか**」と聞いた。マワールさんは「**朝から**」一人で働き、「**ほかの入居者さんもおりますので**」その対応もしなければならず、山本さんの服が後ろ前だったことに気づかなかった。「**すみません、わからん、また気をつけます**」と謝ると、北川さんは「**リーダーさんに言わないかんでしょ**」と言い、そのあと「**ずっと怒りました**」「**わたしと話してない**」状態だった。

翌日の日曜日、マワールさんは遅出だったが、いつもなら8時半ごろには仕事が全部終わっているのに、その日は「**ぼんやり**」して「**9時半（になっても）まだ終わりません**」という状態だった。月曜日、リーダーの野田さんが研修から戻ってくると、マワールさんは野田さんに山本さんの服について報告し「**すみませんでした**」と謝ったが、野田さんはもうその話を聞いていて「**はいはい、大丈夫よ**」とマワールさんの肩に触り、「**心配しないで**」と言ってくれた。マワールさんが「**この状態、続いたら、わたし異動したいです**」と言うと、野田さんは「**どうしたん？**」と聞いた。マワールさんは、「**わたしの気持ちも、がんば、あー、悪くなったし、がんばらないし、仕事もぼんやりして**」と言うと、野田さんは「**マワールさんの気持ち、相手に伝えて、xxx、一緒に相談します、しよう**」と言ったという。「**わたしは、泣きましたら、ちょっと、リーダーさんの気持ちも、たぶん、フフ、一緒にかな**」と、リーダーさんも「**涙が出てきて**」いたという。それから職員5人が集まると、北川さんは「**ちょっと、マワールさん、もし、わたしの言葉が、きつ、きつい、きつかったら、ごめんなー**」と謝り、マワールさんも「**わたしも悪いけど、申し訳ないです**」と言って、「**わたしと北川さんは、ちょっと泣きました**」という。マワールさんはあの日は「**二人しかいませんから、ちょっと疲れました**」と振り返り、このような「**相談がなかったら、ちょっと困る**」ことになっていたと思うとも語っている。そして、相談したことは「**とてもいいと思います**」と考えていた。

7月

マワールさんは野田さんに「**ちょっと注意され**」てしまう。その日、マワールさんは「**遅出**」で午後「**4時から10時、10時まで一人で**」勤務していたのだが、「**5時半**」ごろ施設に「**お客さん**」が来た。「**6時までは**」事務所の人がいて「**普通は事務所の人**」が対応するのだが、なぜか「**わからない**」が事務所の人は「**もう帰ってしまった**」ようだった。「**お客さん**」はマワールさんの知らない入居者の名前を言ったため、「**すいません、ちょっと待ってください**」と言って隣のユニットの空町に電話した。空町のリーダーの岡村さんが出たが、岡村さんは「**わたし、ここに（勤務しているのは）一人よ**」と言い、マワールさんも「**わたしも一人ですよ**」と言った。「**事務所の人は？**」と聞く岡村さんに「**たぶん帰りました**」と答えると、岡村さんは自分で「**事務所に電話し**」たが、やはりいなかった。マワールさんは岡村さんが対応してくれると「**岡村さんに任せ**」たのが、実はだれも対応していなかった。「**15分ぐらい**」たって、またベルが鳴り、はじめてそのままになっていることがわかり、岡村さんはお客さんに謝ったという。マワールさんは「**わたしのせい**」、「**お客さんが、そのまま、気持ち悪いかなーと思って、ま、それはだめやね**」と思っていた。次の日、マワールさんはリーダーの野田さんに「**お客さんが来たらどうしますか**」と「**ちょっと注意され**」たが、野田さんは両腕を曲げて腰の位置に置き、「**顔が笑いながら**」だったという。マワールさんは「**すいません**」「**わたしのせいですので、ちょっと、また気をつけます**」と謝ったという。

8月

今度は「**野田さんと北川さんと（の間に）ちょっとけんか**」があった。野田さんは早出で「**7時から4時まで**」、マワールさんは日勤で「**9時から6時**」、北川さんは遅出で「**6時から10時まで**」の予定だったが、北川さんから「**気分が悪い**」と「**野田さんに電話**」が入り、野田さんが北川さんの代わりに「**6時から（勤務を）続ける**」ことになった。マワールさんは野田さんが入ることを知らなかったため、野田さんが6時の申し送りに来たとき、「**びっくりし**」て「**大丈夫ですか**」と聞いた。すると、野田さんは「**ちょっと、わたしのほっぺた**」を両手で包み、「**大丈夫ですよ、マワールさん**」と言ったのだという。マワールさんは「**それはえらいじゃないですか**」と言ったが、野田さんは「**いいよ、別に**」と言って勤務を続けた。翌日はマワールさんが早出、野田さんは「**10時から14時まで**」の「**半日**」勤務、北川さんは「**13時から**」の遅出だった。野田さんは「**入居者さん**」や「**わたしと話したり**」して、「**気持ちがよかった**」とマワールさんは思っていた。しかし、北川さんが「**お疲れさまでーす**」のようなことも「**言わない**」でやって来ると、「**野田さんの顔？、ちょっと、わ、悪い**」感じになったという。マワールさんは野田さんに「**先に申し送りして**」と言われ、北川さんに申し送りをした。申し送り後、

北川さんは野田さんに「**きのう、すいませんでした、申し訳ないです**」と言ったが、「**野田さんが何も言わなかった**」ので、「**北川さんがもう１回、野田さん、すいません**」と言うと、「**野田さん、大きい声で、ちょっと、なんか、話がわからないですけど**」何かを言い始めたという。野田さんは「**調子が悪かったら、それは、わかって、い、今、わかってるけど、ほかの職員が（大変なのも）、ちょっと考えてみて**」というようなことを言っているようだった。野田さんは勤務が続いていて疲れていただろうし、野田さんの気持ちとしては「**お疲れさまです、だけでも、もうけっこうかな**」とあいさつだけでもほしかったのではないかとマワールさんは考えている。「**仕事のとき、たぶん、声かけが大事**」なのだという。「**ユニットで、仕事もバラバラになって**」いるが、「**今は、野田さん、もっとがんばっています**」とマワールさんはいう。

マワールさんにはよく「**冗談したり**」する入居者がいる。「**釜本さん**」という「**92歳**」の女性の入居者である。この間、釜本さんがうとうとしながらベッドに座って体を揺らしているとき、マワールさんが「**ドアから、ばあちゃんと呼**」ぶと、「**釜本さんがちょっと、こっちこっち**」と手招きしたという。マワールさんが「**いやいやいや**」と返事すると、釜本さんはまた「**こっち来てこっち来て**」とするそうで、その様子が「**かわいい**」のだ。そして、マワールさんが「**どこ行きたいのー？**」と聞くと、釜本さんは「**お便所行きたい**」と言う。マワールさんがお便所は「**ちょっと壊れていますよー**」と言うと、釜本さんは「**ほかの便所行くわ**」と答える。こんな「**冗談**」がマワールさんには「**気晴らし**」になり「**楽しい**」という。冗談以外にもどきどき釜本さんはマワールさんやティカさんの頭をなでてくれる。「**釜本さんがベッドに座って**」、マワールさんは「**床に座って**」釜本さんのひざに頭を置いている。そうすると釜本さんはマワールさんの「**髪**」をなでてくれる。マワールさんはこの話をしているとき「**ばあちゃん、ありがとねー**」と言い、「**うれしい、ほんまに**」と話していた。釜本さんは本当に「**おばあちゃんみたい**」なのだという。釜本さんのほかに実は、西さんもマワールさんは「**おばあちゃん**」と呼ぶことがある。ほかの入居者にはそのような呼び方をするのは「**難しい**」のだが、西さんは不穏でなければ、顔の表情から「**うれしそう**」な感じや「**怒りにくい**」感じがするという。

水町で「**一番年上**」の女性の「**小村さん**」は「**最近、うーん、立ち上がりが悪い**」ため、トイレ介助のとき注意している。どうしても「**できなかったら二人介助**」でしているが、「**できればリハビリのために**」小村さんに立ってもらい、自分一人で介助している。小村さんのトイレ介助を一人ですることは「**わたしと、ティカさんと、野田さん、が、トイレ介助、できます、北川さんが、小村さんのー、トイレ介助は、できない**」という。マワールさんが一人で介助するときは、「**ズボンを下すとき**」小村さんが「**もし、ふらふら**」していたら、「**ちょっと１回、トイレに座って**」、「**洗面台に**」「**両手はつかまって**」もらい、「**しっかり立ててくださいねー、がんばってくださーい**」と「**もう１回声かけ**」する。すると、「**立ててくれ**」、マワールさんは

「**本人もがんばっています**」という。このやり方は仕事の「**始めのー（ほうに）**」「**塚本さんから教えてもらいました**」という。また翌月のインタビューで、この小村さんのトイレ介助とは別の話をしていたときに、マワールさんはインドネシア人の先輩に教えてもらうと覚えやすいと語ったあとに、「**例えば、トイレ介助、小村さんが、どこかが、うーん、どこかが、気をつけることとか、もし、後輩に、説明したら、わたしもっと覚えていますですよね**」と話しており、マワールさんは小村さんのトイレ介助についての注意点を先輩からも教えてもらっていた。

9月

9月になると北川さんが辞め、マワールさんの仕事は「**もっと大変**」になった。実は8月からティカさんも翌年受ける国家試験の「**勉強**」のため勤務時間が減っていた。マワールさんは「**北川さんがちょっと急に辞めて**」「**全部勤務**」も「**変更**」され、「**ずっと1週間**」勤務しなければならなかったが、野田さんは「**9日間**」というのもあった。この間の「**月曜日**」、マワールさんは「**午前中、お風呂（介助を）4人**」し、「**昼から先輩、2人**」したという。先輩のティカさんは「**もういいよー**」「**無理しなくてもいい**」と言ってくれたが、お風呂介助ができるのは「**わたしとティカさん、野田さんだけ**」で、ほかにできる「**職員がいないですので**」自分でしている。

西さんと釜本さんはマワールさんが「**おばあちゃん**」と呼ぶ入居者であるが、実は「**おばあちゃん**」という呼び方は「**日本人の職員は言いません**」という。しかし、「**インドネシアで、もし、おばあちゃん、おばあちゃん、それはいい**」呼び方で、「**名前は失礼**」なのだそうだ。ただ、日本で「**家族じゃない人**」に「**おじいちゃん、おばあちゃん**」と呼ぶことについて、マワールさんが「**聞いたことは、なんか、それは、失礼**」で、系列施設で働くインドネシアの「**友達、リナさん、なんか、おばあさん、おばあさん（と呼んで）、なんか、それは注意されました**」という。マワールさんは筆者に「**おじいちゃんとおばあちゃん、失礼ですか、先生**」と聞いたので、失礼かもしれないが近い感じがすると答えると、マワールさんはインドネシア語では「**近い感じじゃなく上の人**」という感じがあると言った。そして、なぜ入居者を「**おばあちゃん**」と呼ぶか聞くと、「**わたしのおばあちゃんみたいです**」、「**インドネシアで、あの、いつも、おばあちゃんと、よん、呼びますから、おばあちゃん、おじいちゃん。名前は、ちょっと、インドネシアでだめですので**」とマワールさんは答えた。「**おばあちゃんみたい**」というマワールさんに筆者がマワールさんの実のおじいちゃんとおばあちゃんついて聞くと、マワールさんは「**亡くなりました**」と答えた。「**お母さんのおばあちゃんとおじいちゃんは、もう、だいぶ**」前、マワールさんがまだ「**ちいちゃい**」ときだったので、「**顔も覚えてません**」が、「**一番、最後（に亡くなったの）は、お父さんのおばあちゃん**」で、マワールさんは「**9歳ぐらい**」だったので、

「**顔もまだ覚えています**」という。この「**おばあちゃん**」はうちも「**近いですので、ちょっといつでも、行きます**」といい、「**一泊、泊まります**」ということもあった。「**おばあちゃん**」からお父さんに「**秘密**」で「**お金**」を「**もらった**」りもした。マワールさんは今、日本にいて「**お父さんとお母さん、ちょっと遠いですので、だれかが、お父さんとお母さん、に、みたい**」「**だれかが、お父さんとお母さんになりたい、え？、なりたい**」と思っている。この「**だれか**」とは「**入居者さん**」のことであり、入居者を「**家族と思**」ったほうがいいという意味なのだという。「**入居者さんがお年寄りだから、りょうさい、両親もお年、だから、あーん、両親に同じ、なんか、わたしの、うーん、やり方とか、なんか、ゆったことは、入居者さんに、り、両親と同じ**」、つまり、入居者も両親もお年寄りなので、自分の行動や話す言葉は入居者に対しても両親に対しても同じでありたいということだった。だから、入居者に「**失礼ことは、ちょっと、いわ、言わないほうがいい**」と思うのである。しかし、「**おばあちゃん**」と呼ぶことについて釜本さんと西さん以外の「**ほかの、人は、なんか、む、難しい**」という。「**どうしてかな**」わからないが、「**自信がない**」。「**もし山本さんにゆったら、怒るかな**」と思うそうだ。

10月

「**水町も職員がなかなかいませんので**」、10月から「**ヤンティさん**」という「**空町の人（が）、水町に異動して**」きたが、ヤンティさんは「**まだ空町に手伝って**」いるという。ヤンティさんが来て「**ほんとに助かります**」とマワールさんは思っていて、「**仕事も、今か、今は、え、いつまでもがんばりたい**」と思っている。「**人間関係も、できるし**」「**問題ないです**」という。

釜本さんとはまた「**冗談したり**」しているのだが、マワールさんは釜本さんや他の入居者について話したあと、「**両親に会いたい**」と涙を流した。マワールさんの施設は「**2年間ぐらいで、働いて、で、帰られる**」そうで、一時帰国するのに2年以上働く必要がある。しかし、「**ほかの施設は、ろっ、ろくげ、6か月ぐらい、もう、帰られます**」ということで、「**わたしの施設はちょっと厳しい**」と感じている。しかし、仕事は「**好き**」で、ほかの仕事をやってみたいと思わないかと筆者が質問しても、「**ううん**」とマワールさんは答える。なぜなら、「**介護福祉士、介護、うん、たぶん、うーん、わたしから、わたしの命から**」で、「**病気の人とかお年寄りとか、なんか、手伝いたい**」というのだ。そして、マワールさんが高校生のときインドネシアで「**看護師見たら、まー、優しくて**」「**看護師になりたい、かなーと思って**」と話した。「**わたしの命**」という言葉が気になり、筆者が翌月のインタビューでさらにその意味を尋ねると、マワールさんは「**介護のー、仕事は、やりたい、もっとやりたい、という意味です**」と語ってくれた。

11月

来月から「**職員がなかなか**」「**いないので**」「**水町と空町は１つに**」なるという。マワールさんも空町の仕事をするかもしれないが、それは「**別にかまいません**」という。「**初めは、入居者さんの状態だけ、で、ちょっと、覚え**」なければならいが、「**おむつ介助とかトイレ介助（は）、別に、一緒**」なので、「**問題ない**」のだ。

マワールさんが仕事をしていて「**うれしいことは、うーん、例えば、うーん、であ、入居者さんと一緒に冗談したり、入居者さんと話したり**」することである。この仕事の「**いいことは、たぶん、前、インドネシア人は、冗談が、ちょっと、好きですので、たぶん、うーん、入居者さんと一緒に冗談したら、うれしい**」という。また、「**ティカさんと、じょ、話したり、ま、いろいろな話、するのは、うれしい**」という。職員の中で「**よく冗談するのは、ティカさんと一緒**」のときである。ほかにも「**ヤンティさん**」ともあるが、「**たぶん、野田さんは、なかなか、まあ、たぶん、言葉が、出てこんですので、わたしは日本語がなにかな**」という。ティカさんとヤンティさんとは「**仕事のことーを、話したら、日本語、冗談のこと、をしたら、インドネシア語**」である。野田さんとは「**話すのは、たぶん、入居者さんのことだけ、例えば、申し送り**」で、「**冗談はあまり**」ない。「**トピックは、なかなか、考えてない**」と話すトピックに困っていた。マワールさんはこの間、西さんと「**英語**」で「one, two, three, four」と一緒に言ったという。しかし、「**もし、野田さんは、もし、one, two, three, fourまー、それは、ハハ、たぶん、マワールさん、変な、変かな、頭が**」といい、野田さんに西さんとしたような話をすれば、頭が変だと思われると考えていた。西さんにはほかにも「**ときどき、インドネシア語教えます、わたし**」という「**例えば、愛してるって、インドネシア語は、aku cinta kamu、西さんはゆってくれました**」といい、「**aku cinta kamu って、なんですか**」と聞く西さんに、マワールさんは「**愛してる、という意味です**」と答えたというのである。西さんはそれを聞いて「**笑ってくれました**」という。マワールさんが西さんに英語やインドネシア語を使うのは、いつもするような「**テレビの話じゃなくて、ほかの話もいいと思います**」という理由からだった。とはいっても、マワールさんは「**英語は、わたし、少ししかわかりませんので、フフ、まあ、ま、西さんも**」と英語に関してはマワールさんも西さんもそれほどわかるわけではなかった。マワールさんは「**いそがし、ことなかったら、まあ、入居者さんと、話したり、冗談したり**」している。このように入居者と話すことをマワールさんは自分も「**楽しい**」し、「**入居者さんの気持ちもいいかなーと思い、フフ、って**」いる。

12月

水町と空町は「**1つになり**」、リーダーは別の人になって「**サブリーダーは野田さん**」になっ

た。働き始めて1年がたつが、「**大学**」が「**終わってから、すぐに仕事**」をして、水町での仕事は「**初めて経験**」した仕事になる。これは「**すごく経験になります**」とマワールさんはいう。この1年でマワールさんは「**入居者さんの状態、例えば、この人は、えっとー、えっとー、あー、不穏があるとか**」、「**入居者さんの、トイレ介助とか、あー、職員のー、仲良く、のことかとか、もう全部、勉強になります**」と語り、筆者がマワールさんに一番大切だと思うのは何かという質問をすると、「**一番大切のはー、やっぱり入居者さんですよね**」と答えた[12)]。「**入居者さんの気持ちとか**」「**よくなるように**」したいという。さらに、入居者の気持ちがよくなるように、どんなことをしているかという質問には、「**例えば、食事介助のときは、ちょっと、ゆっくり食べさすとか**」、「**トイレ介助のときは、よく支えるとか、えっと、移乗のときは、あー、えと、そ、同じですよね、さ、よく支えるとか、お風呂のーことも、えっとー、もしなにがあったら、ちょっとー、できれば、あーと、入居者さんの状態は、よく見てとか**」と答えている。こういった介助のほかにも、入居者と話すときは、「**トピックはなにかとか、ちょっと考えて、話す**」という。「**テレビのトピック**」のような「**難しいない**」ものがいいのだ。しかし、マワールさんは「**わたしは、えっと、話すことは、上手ことない**」し、「**日本人みたいじゃない**」、「**言葉が出てこん**」という。就労前の日本語研修で勉強しておいたほうがいいことは何かという質問にも「**会話**」と答え、会話は入居者との「**関係がよくなりますように**」大切だと考えていた。そして、マワールさんは「**komunikasiはあまり上手ないです、ので、後輩は、うーん、わたしのこと、えっとー、できれば、えっとー、あ、したくない？**」と、コミュニケーションがあまり上手ではない自分のように後輩にはなってほしくないと考えていた。

国家試験合格後についてマワールさんは「**インドネシアに住むことはいいけど、日本のほうが、いいと思います**」と思うようになっていた。「**前は、わたし、（インドネシアで）両親を世話したいですけど、うーん、両親にここに、ここに来て、一緒に、フフ、住みたい、かな**」とインドネシアに帰って世話するのでなく、両親を日本に連れてきて一緒に住みたいと考えるようになっていた。インドネシアは人が「**多くて、ちょっとうるさい**」し、「**車とか、えっと、バイクとか**」の「**けむりはちょっと多くて、体によくないですので**」という。

6. 考察

以上、マワールさんの1年について記述してきたが、ここではマワールさんの言葉に注目し、マワールさんが入居者や職員との間でどのような意味を創り出してしていたのかを、「専有」（石黒, 2004; ワーチ,2002）という枠組みから考察する。

6. 1. 入居者との間で用いられた言葉

6. 1. 1. おばあちゃんという言葉

「**おばあちゃん**」という言葉は釜本さんと西さんに使われていた呼称であるが、日本人職員は使っていなかった。マワールさん自身も日本では家族でない人にそういった呼称を使うのは失礼だと聞いたことがあると語っており、さらに、系列施設で働くインドネシア出身のリナさんが施設で「**おばあさん**」と呼んで注意されたことも知っていた。しかし、マワールさんがそのように呼ぶのは「**わたしのおばあちゃんみたい**」だからであった。これは、マワールさんが9歳のとき亡くなった父方の祖母のことである。また、マワールさんは両親と離れて暮らしているので、入居者を家族だと思ったほうがいいとも考えていた。マワールさんは両親同様「**お年寄り**」である入居者に対し、失礼な言動はしないほうがいいと考えていたが、「**おばあちゃん**」は失礼かとマワールさんに聞かれて筆者が近い感じがすると答えたときも、マワールさんはインドネシア語では「**近い感じじゃなく上の人**」と語っていた。「**おばあちゃん**」はインドネシア語ではむしろ敬意を表す言葉となり、マワールさんはあえてインネシア語での「**おばあちゃん**」の意味を日本語の「おばあちゃん」に持ち込んで使っていた。Kramsch（2009）は、言葉にはそれを使用する人の思いが残されており、そういった思いの跡はスピーチコミュニティごとに違うとしている。マワールさんが感じる「**おばあちゃん**」は筆者が感じる「おばあちゃん」とは確かに違っていた。しかし、西さんや釜本さんへの「**おばあちゃん**」という言葉にはインドネシア語でいう一般的なおばあちゃんを越えた、父方の祖母や両親という特定の顔をもつ人々が重ねられていたのではないか。つまり、インドネシア語の語感と一緒に、マワールさんの祖母の記憶や両親への思いも持ち込まれているのではないか。マワールさんは10月に2年以上働かなければ一時帰国できない施設の規則を厳しいといい、「**両親に会いたい**」と涙を流していた。また、そもそも看護師を志望した理由も将来両親を「**お世話**」できるからで、その思いは国家試験合格後インドネシアに帰らずに日本で長く暮らしたいと思うようになっても一貫して変わっていない。マワールさんにとって家族は特別な存在であり、自分が大切に思う家族のように敬意をもって接したい人として釜本さんと西さんはあるのではないか。そう考えると、マワールさんは釜本さんと西さんとの間に、筆者が感じる「おばあちゃん」や施設が使用を禁止する「おばあちゃん」とは異なる、新たな意味を生成していたといえ、そこには「家族のように大切な人を敬い慕うわたし」という主体が構築されていると考えられる。もちろん、これは釜本さん、西さんだから可能なのであり、全ての入居者との間で構築されていたわけではない。マワールさんはほかの入居者に対しては「**難しい**」といい、「**もし山本さんにゆったら、怒るかな**」と語っている。次項以降では釜本さん、西さんとの間の個別のやりとりを見ていきたい。

6. 1. 2. 釜本さんとのやりとり

マワールさんは釜本さんとよく「**冗談**」を交わしていた。例えば、「**こっちこっち**」と手招きする釜本さんに「**いやいや**」と言ったり、「**お便所行きたい**」という釜本さんにお便所は「**壊れていますよー**」と言ったりしている。このようなマワールさんの釜本さんへの対応は、例えば就労前の日本語研修などで教えられたものではない。介護職員は入居者を受容し、その要望にできる限り応えることが一般的には求められている。マワールさんは入居者の要望に応えるという介護職員としての一般的・規範的反応とはあえて逆の反応をとっているといえる。社会学の見地から自己やアイデンティティを研究するBurkitt（1998）は、慣習的意味をもたらすとされるバフチンのジャンル論を援用し、発話の個性、すなわち専有としてのユーモアについて指摘している。Burkitt（前掲）によると、ユーモアとは標準的または期待されるものにあえて反対のものや皮肉を自分の印として言葉に染み込ませることであり、話し手のその人らしさを表現する手段であるという。釜本さんのほかにもマワールさんは職員のティカさんやヤンティとも冗談を交わしており、仕事のことを話すときは日本語だが、冗談を言うのはインドネシア語だと11月に語っていた。職員との間では冗談はインドネシア語によって成り立つものだったが、釜本さんとの間では日本語を通して表現されている。マワールさんは「**インドネシア人は、冗談が、ちょっと、好きですので、たぶん、うーん、入居者さんと一緒に冗談したら、うれしい**」と話していた。釜本さんと冗談を交わすことは、規範からあえて逸脱することで、ティカさん、ヤンティさんとの間でインドネシア語で構築された「冗談が好きなインドネシア人のわたし」というシンボリックな主体を日本語でも構築することを可能にしたのではないか。そして、マワールさんがこのような対応をするのは、前項で述べたように「**おばあちゃん**」という言葉に重なる釜本さんへの特別な思いによるものだといえるのではないだろうか。

6. 1. 3. 西さんとのやりとり

西さんはマワールさんの語りの中で最も早く出てきた入居者で、インタビューを開始した1月にすでにマワールさんは西さんは「**しっかりおしゃべりする**」人で「**おもしろい**」と語っていた。ただ不穏な状態になると「**難しい**」といい、2月になっても「**不穏があったら、怖いと思います**」と語り、そういう時は「**何をしたほうがいいですか、まだ**」わからない状態だった。しかし、3月に子どもにお金をいくら貸しているか西さんに聞かれたとき、マワールさんはまったく身に覚えのないことであったが、「**西さん、また教えますよ、わたし仕事やけんなー**」と答えていた。その応答に西さんも「**わかります、ごめんなさいね**」と言ったとされ、その場が収まっている。これは2月までのマワールさんとは大きく異なる対応である。しかも、この状況における「いくら貸したか」という質問への答えは非常に難しく、マワールさんはこのとき

怒りたい気持ちもあったと語っていたことから、それまで以上に対応の難しい質問だっただろう。しかし、その際「**わたしの心は仕事よって**」言い、「**我慢**」したと語っていた。では、この「**仕事**」というのはマワールさんにとってどのような意味があったのだろうか。

10月にマワールさんは今の仕事を「**わたしの命**」だと表現している。「**命**」とは「**介護のー、仕事は、やりたい、もっとやりたい、という意味**」であった。「**病気の人とかお年寄りとか、なんか、手伝いたい**」とも語っており、そこには「**看護師見たら、まー、優しくて**」「**看護師になりたいかなー**」というように高校生のときに出会った優しい看護師の像があった。しかし、上述した西さんへの対応は3月に語られたものである。実は、同じ3月のインタビューでも高校のときに出会った看護師の話が出ていた。そしてその直後、今介護の仕事をしているマワールさんはどんな介護士になりたいかと筆者が質問すると、マワールさんは「**親切な人**」になりたいと答え、「**患者さん**」や「**患者さんの家族**」を「**親切に見てあげ**」たいと語っていた。この時、「利用者」や「入居者」ではなく「**患者**」という言葉が使われていたのだが、これはその直前に看護師の話をしていたからだと思われる。ただ、ここでいいたいのは3月のインタビューでも10月のインタビューでも、高校生のときに出会った看護師に介護職員として働く自分を重ね合わせて語られていたということである。マワールさんが介護職員として働く中であの看護師は理想の像としてあり、介護の仕事とはその看護師のように「**病気の人やお年寄り**」を「**親切に見てあげ**」ることだったのではないだろうか。そして、それはやらなければならないことではなく「**わたしの命**」として「**やりたい**」ことだったといえるだろう。身に覚えのない質問をされ、怒りたいと否定的な気持ちになった際に語った「**仕事よ**」というのは、あの看護師のように西さんを「**親切に見てあげ**」ることで、この場合は西さんの言葉を否定せずに受容することだったといえるだろう。つまり心の中でつぶやいた「**仕事**」という言葉は、憧れの看護師の記憶が刻まれた主観的意味をもったものとしてマワールさんに響いていたのではないだろうか。

一方で、働き始めた1月、マワールさんは当時のリーダーの塚本さんの厳しい指導に泣くこともあったが、2月には仕事が少しずつできるようになり、職員の数が足りていないと水町の状況に気づくようになっていた。そして3月にはほかの職員に「**同伴**」されず初めて一人で遅出勤務を経験するなど、人手不足の水町で一人で仕事をするようになっていた。そのような中、身に覚えのない西さんの質問について長く時間を費やすことは現実的に難しかっただろうと思われる。マワールさんは西さんの質問に「**西さん、また教えますよ、わたし仕事やけんなー**」と応じたが、そこでも、やはり「**仕事**」という言葉が使われている。マワールさんが心の中でつぶやいた「**仕事**」は憧れの看護師のように入居者を「**親切に見てあげ**」受容することであったが、一方でマワールさんには人手不足の水町で自分の役割を果たすという仕事もあったといえる。マワールさんの「**西さん、また教えますよ、わたし仕事やけんなー**」という言葉におけ

る「**仕事**」とは、水町のメンバーとして自分の役割を果たすという意味があったのではないだろうか。

マワールさんは2月までは不穏になる西さんへの対応に困っていたのだが、3月には西さんのことをもう「**わかっています**」と語るようになっている。「**仕事**」という言葉は一方で「憧れの看護師のような介護職員としてのわたし」を構築し、他方では「水町のメンバーとして働く介護職員としてのわたし」を構築する言葉となっており、そのような「**仕事**」に対する独自の意味の生成が西さんの対応への変化につながっているといえるのかもしれない。

次に、西さんとのコミュニケーションでは理解しやすい話題を提供するにあたり日本語以外の言語も持ち込まれていた。11月にマワールさんは西さんに「aku cinta kamu」というインドネシア語を教えており、「aku cinta kamu **って何ですか**」と聞く西さんに「**愛してる**」と答えていた。マワールさんは同じ11月にティカさんやヤンティさんとはよくインドネシア語で冗談を交わすと語り、冗談は先述したように「冗談が好きなインドネシア人のわたし」という主体を構築することであった。マワールさんは12月に入居者と話すときは、「**トピックはなにかとか、ちょっと考えて、話す**」といい、「**テレビのトピック**」のような「**難しいない**」ものがいいと語っている。テレビは西さんとの間で最も取り上げられるトピックで、認知症の西さんについてはこの「**難しいない**」トピックは特に大切だといえる。しかし、マワールさんにとって日本語という言語リソースだけでは 、マンネリ化したテレビの話題に変化を与えることは難しかったのではないか。だからこそインドネシア語というマワールさんの強力な言語リソースを用いたのではないだろうか。インドネシア語はマワールさんらしさを表現しやすい言語だといえ、数ある言葉の中で、「愛している」に相当する「aku cinta kamu」を教え、その意味を知った西さんが笑ってくれたという語りからは、冗談が好きなインドネシア人のマワールさんが垣間見える。

また、マワールさんは11月には「**テレビの話じゃなくて、ほかの話もいいと思います**」と、「one, two, three, four」と英語で西さんと数を数えていた。英語で数を数えることついて、マワールさんは野田さんに言ったら頭が「**変**」だと思われると語っていた。このことは裏を返せば、西さんであれば頭が変だと思われないということである。マワールさんは英語が実は得意ではなく、西さんも恐らくそうであった。西さんと自分はそのような得意ではない英語で「**難しいない**」トピックを共有できる者同士であるという思いがマワールさんにはあったのではないか。

2.2.で述べたように、Kramsch（2009）は多言語話者の場合、選択する言語やコードによって様々な記憶や期待がもたらされ、それに応じて多様な主体を構築することができるとしている。インドネシア語の選択はマワールさんに「冗談が好きなインドネシア人のわたし」という

主体の構築を可能にし、また英語の選択は西さんとだったら楽しめるだろうという期待によって「難しくないトピックを共有できるわたし」としての主体が構築されていると考えられる。このように日本語以外の言語を持ち込むことは、マワールさんの多様な主体を構築することにつながっているのである。

6. 1. 4. 小村さんとのやりとり

8月に語られた水町で「**一番年上**」の小村さんは、立ち上がりに困難のある入居者で、トイレ介助では注意が必要だった。マワールさんはズボンを下すとき、小村さんがふらふらしていたら、一度座ってもらい、両手で洗面台につかまってもらったあと、「**しっかり立ててくださいねー、がんばってくださーい**」という声かけを行っていた。この声かけは本来なら「立ってください」と言うべきなのだが、ここで注目したいのは小村さんが「立つ」ことは排泄行為を行うためだけでなく、立つことそのものも目的とされていたという点である。マワールさんは「**できればリハビリのために**」自分で立ってもらったほうがいいと語っていた。介助を行うにあたって声かけは必須のものとされるが、マワールさんにとってこの声かけは排泄行為の遂行にとどまらず、小村さんの残存機能を生かすために必要なものとして受け止められていた。言い換えれば、介助行為に伴う形式化された声かけではなく、小村さんという個別の入居者に向き合う中で、この入居者に何が必要であるかを認識し発せられた言葉なのである。「立つ」ことは単に足を使って体を縦に支えるという動作を表すのではなく、小村さんの自立を支えるものとしてマワールさんによって新たな意味を見出されていたといえよう。

もちろん声かけだけが小村さんが自分で立つことを可能にしたわけではなく、小村さんがふらふらしていたら一度座ってもらい、両手で洗面台につかまってもらうというマワールさんの介助技術も不可欠なものである。これは職員の北川さんができなかったことからも、だれもができる容易なものではないことがわかる。小村さんのトイレ介助の方法は働き始めた当初、当時のリーダーの塚本さんに教えられ、またインドネシア人の先輩にも注意すべき点を説明してもらうことで強化されている。水町の熟練したメンバーによる適切な指導と助言により身につけた技術である。そして、マワールさんはこういった介助技術にも意味を見出していた。働き始めて1年となる12月、マワールさんは自分が大切だと思うことについて「**一番大切のはー、やっぱり入居者さんですね**」、「**入居者さんの気持ちとか**」「**よくなるように**」したいと語っていた。そして、そのために食事介助でゆっくり食べてもらうこと、トイレや移乗介助でしっかり支えること、お風呂介助では入居者の状態をよく見ることに留意していると語っていた。マワールさんにとって食事やトイレ、お風呂などの介助は単なる技術ではなく、入居者の気持ちがよくなるための行為として捉えられていたのである。マワールさんは小村さんが立つことに

ついて「**本人もがんばっています**」と語っており、小村さんへの介助行為も入居者の気持ちをよくするもの、小村さんが自力で立とうする意欲を促すものとして解釈できる。

このように「**しっかり立ててくださいねー、がんばってくださーい**」という言葉は介助行為と一体となり、小村さんの自立を維持するという意味が生成されていたといえる。さらに、このような「立つ」ことへの意味づけは「**わたしの命**」というマワールさんの仕事観に支えられていると考えられる。6.1.3で述べたとおり、「**わたしの命**」とは「**病気の人とか、お年寄り**」を「**手伝いたい**」、「**親切に見てあげ**」たいものとしてあった。ここでは「小村さんの排泄と自立のお手伝いをするわたし」としてのマワールさんが構築されているといえるだろう。そう考えると、マワールさんが「立って」ではなく「**立てて**」と言っていることは「誤用」として見るべきではなく、マワールさん独自の専有された言葉として見るべきだといえるであろう。

6. 2. 職員との間で用いられた言葉

6. 2. 1.「えらい」という言葉

水町での仕事が語られる際によく使われていた言葉に「**えらい**」がある。マワールさんは日本人職員が誤嚥した入居者に「**えらいね**」と言い、入居者が「**えらいよ**」と答えるのを聞いて、先輩に意味を確認し覚えたと4月に語っていた。そして10日以上も休みがとれない自分の勤務状況や、おふろ介助を野田さんとティカさんの二人だけですることを「**えらい**」と表現していた。さらに、8月に欠勤した北川さんに代わって野田さんが早出のあと遅出勤務もすることになった際、「**大丈夫ですか**」というマワールさんの頬を野田さんは両手で包みながら「**大丈夫ですよ、マワールさん**」と答え、それに対し「**それはえらいじゃないですか**」とマワールさんは言ったと語っている。「**えらい**」という言葉は肉体的または精神的にも大きな負担が必要とされるものとして水町という場と密接にかかわりながら語られていた。

マワールさんは2月にすでに水町には人手が足りていないと認識するようになり、3月には「**同伴**」されずに一人で仕事をするようになるが、その分負担は大きくなり勤務もきつくなっている。1年の語りを通してみても、4月は北川さんが入院し、8月以降はティカさんが勉強のため勤務が減り、さらに9月には北川さんが辞め、マワールさんは休み返上で働いていた。人手不足にある水町での勤務は過酷なものだといえ、「**えらい**」という言葉は水町で働くことを象徴するような言葉にもなっている。「**えらい**」が表すものはほかの言葉に置き換えられない、水町という場とそこにかかわる人々の歴史やものの見方が染み込んだもの、「皮膚感覚ともなっている対象」（西口, 2015: 12）としてあるのではないか。そして、マワールさんはこの「**えらい**」が生み出す社会歴史的意味を水町で働く中で実感し、自らの経験から解釈し直していったともいえる。言い換えれば、水町での実践への参加の中で自らが肉体的または精神的に感じる、主

観的意味をもつものとして「**えらい**」という言葉はあり、同時にその言葉を使うことはマワールさんを水町のメンバーたらしめることにもなっているのである。マワールさんが休みのない自分の勤務を「**えらい**」と語ることは、水町のメンバーとして従事する仕事をそのようなものとして認識しているといえる。また、野田さんやティカさんの二人だけにお風呂介助をさせてしまうことを「**えらい**」ということも、同じ水町のメンバーだからこそ理解できる大変さを表し、その大変な仕事を担う野田さんとティカさんへのねぎらいがあったのではないだろうか。つまり、「**えらい**」という言葉は「人手不足にある水町のメンバーとしてのわたし」という主体を構築する言葉となっているといえるだろう。

6. 2. 2. 野田さんとのやりとり

「**えらい**」という言葉をマワールさんの水町でのメンバーシップにかかわる言葉として考えるならば、8月に北川さんの代わりに野田さんが遅出勤務をすることになった際の「**それはえらいじゃないですか**」に先行するマワールさんの「**大丈夫ですか**」という野田さんへの言葉もまた新たな解釈ができる。「**大丈夫ですか**」というマワールさんに対し、野田さんはマワールさんの頬を両手で包み「**大丈夫ですよ、マワールさん**」と答えたのだが、なぜこのシンプルな言葉に野田さんはそのような反応をしたのだろうか。

まず、マワールさんの野田さんに関する語りを見ていくと、初めは必ずしも好意的なものではなかった。塚本さんに代わり野田さんが3月から新しいリーダーになると知った際、マワールさんはナースコールが鳴っても動こうとしない野田さんのリーダーとしての資質に疑問を感じていた。3月に野田さんが実際にリーダーになるとその懸念は杞憂に終わったが、野田さんの遅出勤務が少ないことに「**バランスがない**」と不満を感じていた。しかし6月、マワールさんは山本さんの服の着せ間違いを北川さんから指摘され口をきいてもらえなくなり、ユニットを異動したいと願い出るほど落ち込むことになる。その状況に二人が話す場を設けたのは野田さんで、結果として二人は和解に至っている。マワールさんも野田さんに相談したことは「**とてもいいと思います**」と語っていた。7月にはマワールさんの来客を待たせたミス[13)]に野田さんは笑いながら注意するという寛容な対応をとっていた。以上のような経緯を見ていくと、野田さんはリーダーとして水町をまとめるようになっており、それとともにマワールさんは野田さんを水町のリーダーとして認めるようになっていったといえるのではないか。

こうした野田さんに対する認識とともに、マワールさんは前述したような「**えらい**」が表す意味を水町で働く中で身をもって知っていた。このマワールさんが実感してきた「**えらい**」という経験は、早出勤務を終え再び遅出勤務をすることになった野田さんによってまさに経験されようとしており、「**大丈夫ですか**」という言葉は水町での「**えらい**」経験を知る者の声として

発せられたと考えられる。「**大丈夫ですか**」と問うことは、早出勤務のあとさらに遅出勤務することが問題なくできるのかを問うだけでなく、自分が心底「**えらい**」と感じる経験をまさに野田さんがしようとしていることを心配しているのですというマワールさんの思いも染み込んでいると考えられるのである。つまり、「**大丈夫ですか**」という言葉には、水町での過酷な勤務を経験してきたマワールさんの歴史が重ねられており、その歴史を知っている、あるいは共有してきたからこそマワールさんの言葉は野田さんに響くことになり、野田さんはマワールさんの頬を両手で包み「**大丈夫ですよ、マワールさん**」と応答したのではないだろうか。「**大丈夫ですか**」という言葉は、「今、ここ」にとどまらないマワールさんの歴史が染みついた言葉であり、「水町の『**えらい**』経験を重ねてきたわたし」という主体を構築する言葉でもあるのである。

7. おわりに

ここまでマワールさんの様々な日本語使用を見てきたが、最後に、専有という概念を用いることでマワールさんの日本語をどう捉えていくことが可能なのかについて述べたい。

まず、マワールさんは就労から1年たつ12月のインタビューで、就労前の日本語研修で「**会話**」をしたほうがいいと言っていた。会話は入居者との「**関係がよくなりますように**」大切だが、自分は「**日本人みたいじゃない**」「**言葉が出てこん**」「**komunikasiはあまり上手、ないです**」と思っており、後輩には自分と同じようになってほしくないとも語っていた。確かに、1年間のマワールさんの語りを見てもマワールさんの日本語には「誤用」と呼べるものが様々なところで見られ、また使用する言葉も「**大丈夫ですか**」に見られるように平易なものが多い。しかしこれまで見てきたように、マワールさんが入居者や職員との間で使っている言葉にはマワールさんの思いや歴史が重ねられており、例えば小村さんであれば自力で立つという残存能力の維持に役立っていた。釜本さん、西さん、職員の野田さんとの間でもマワールさんのいう「**日本人みたいじゃない**」日本語によって関係が成り立っている。さらに、日本語の「**言葉が出てこん**」という状態であっても、英語やインドネシア語といったリソースを使用することで多様な話題を提供することができていた。このように考えると、マワールさんのいう「**日本人みたいじゃない**」日本語は一般的な言葉の使用からの逸脱ではなく、また「**言葉が出てこん**」ことさえも、マワールさん独自の創造的な営みとして捉え直すことができるのではないか。マワールさんの言葉は規範的な使用のみを重視する第二言語習得研究では評価されないだろうが、言葉をそれを用いる人の思いも含めたものとして捉えると、マワールさんの独自性として評価できると考えられる。Kramsch（2009）は教師の役割は「学習者を言葉の慣習的な使用法に囲い込むだけでなく、主観的意味が沸き起こるようにする」（p.14）ことであるという。この指摘

はマワールさんの例を見ても非常に示唆に富むものであり、言葉の教育にかかわる者は言葉と人のこのようなあり方を自らの実践においても考えていくべきなのではないだろうか。

注）

1） 就労制限のない「日本人の配偶者等」や「定住者」という在留資格でヘルパーとして働く外国人は従来から存在する。また、看護においては「留学」から国家試験合格後「医療」の在留資格を得る外国人や、NPOが中国の大学等と日本の病院の橋渡しとなり、「留学」の在留資格で日本語学校等に通いながら病院で看護助手として働き、日本語能力試験N1取得後、国家試験合格を目指す外国人も増えている。

2） 制度上の変更についてはEPA看護師・介護福祉士候補者への配慮から論じた布尾（2015）に詳しい。

3） 日本人が多用するオノマトペや不必要に難解な用語など日本人または介護業界側への課題も指摘されているものの、課題の多くは外国人候補者に対するものである。

4） 本稿に出てくる固有名詞はマワールさんを含めすべて仮名である。また、マワールさんが何期のEPA介護福祉士候補者であるかもプライバシーの保護という理由から明らかにしない。

5） 就労を開始した年についてはマワールさんが何期のEPA介護福祉士候補者であるかとかかわるため、プライバシー保護の理由から明らかにしない。

6） 対面インタビューの時期が不規則なのはその時期に長期休暇が取れるという筆者の都合によるものである。

7）「バイタルサイン」のことで、血圧、体温、脈拍、呼吸などの数値を指すが、マワールさんが測っているのは、血圧、体温、脈拍だという。

8） マワールさんは施設を利用する人を「利用者」と言ったり「入居者」と言ったりしていた。就労開始直後は二つの呼称が混在していたが、「ひまわり」では通常「入居者」を使っており、マワールさんの語りも「入居者」という呼び方に統一されていったことから、筆者のストーリーの記述では「入居者」を使う。

9） 水町の職員は全員で5人おり、ここでなぜマワールさんが4人または3人と言ったのかはわからない。一つの解釈として職員は5人いるが、そのうち何人かは休みを取っていたりするので、実際に働く際には4人か3人ぐらいになるという意味だった可能性はあるが、確認はできていない。

10）インタビューではパートの職員の名前は語られなかった。これ以降、パートの職員は登場しないが、それはこの職員に関する語りが少なくストーリーの構成に大きくかかわるものではなかったためである。

11）ラキソベロンのことで大腸刺激性の下剤である。http://zusu.net/mentalhealth/laxoberon/（2016年8月15日閲覧）

12）筆者はこの1年で勉強したことの中で何が一番大切かという意図で質問をしたが、マワールさんの答えからは勉強したことではなく仕事をする中で大切なこととして解釈された可能性がある。だが、いずれにしてもマワールさんが大切だと思うことが語られていることから、そのまま引用した。

13）来客への対応に関しては本来対応すべき事務職員が不在だったことや、岡村さんが、岡村さんとマワールさんのどちらが対応するかを確認しなかったことを考えると、マワールさんだけのミスだとはいえないが、マワールさん自身が「わたしのせい」だと語っていることもあり、このように記述した。

参考文献

石黒広昭（2004）「学習活動の理解と変革にむけて―学習概念の社会文化的拡張」石黒広昭（編著）『社会文化的アプローチの実際―学習活動の理解と変革のエスノグラフィー―』北大路書房, 2-32

イン, R. K.（1996）近藤公彦（訳）『ケース・スタディの方法』千倉書房

上野美香（2012）「EPAによるインドネシア人介護福祉士候補者の受入れ現場の現状と求められる日本語教育支援―候補者と日本語教師への支援を目指して―」『国際協力研究誌』18（3）, 123-136.

上野美香（2013）「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題」『日本語教育』156, 1-15.

遠藤織枝（2012）「介護現場のことばのわかりにくさ―外国人介護従事者にとってのことばの問題―」『介護福祉学』19（1）, 94-100.

大関由貴・奥村匡子・神吉宇一（2015）「外国人介護人材に関する日本語教育研究の現状と課題 －経済連携協定による来日者を対象とした研究を中心に－」『国際経営フォーラム』25, 239-280.

看護と介護のワーキンググループ（2010）『介護福祉士国家試験問題の日本語の難しさについて考えるための基礎資料（改訂版）－第21 回・第22 回試験 の全問分析結果のまとめ（2010 年12月）－』http://www.nkg.or.jp/kangokaigo/images/kisoshiryou-v2.pdf（2016 年8月15日閲覧）

ガーゲン, K. J.（2004）永田素彦・深尾誠（訳）『 社会構成主義の理論と実践―関係性が現実をつくる―』ナカニシヤ出版

三枝令子（2012）「介護福祉士国家試験の日本語: 外国人介護従事者にとってのことばの問題」『介護福祉学』19（1）, 26-33.

桜井厚（2005）「ライフストーリー・インタビューをはじめる」桜井厚・小林多寿子（編著）『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門―』せりか書房, 11-70

中川健治（2010）「介護福祉士候補者が国家試験を受験する上で必要な漢字知識の検証」『日本語教育』147, 67-81.

西口光一（2015）『対話原理と第二言語の習得と教育―第二言語教育におけるバフチン的アプローチ―』くろしお出版

布尾勝一郎（2015）「EPA看護師・介護福祉士候補者への『配慮』の諸相―日本語の作り直しを視野に―」義永未央子・山下仁（編）『ことばの「やさしさ」とは何か―批判的社会言語学からのアプローチ―』三元社, 45-71.

バフチン, M.（1979）伊藤一郎（訳）『小説の言葉』新時代社

バフチン, M.（1988）新谷敬三郎・佐々木 寛・伊東 一郎（訳）『ことば対話テキスト』新時代社

メリアム, S. B. & シンプソン, E. L.（2010）堀薫夫（訳）『調査研究法ガイドブック―教育における調査のデザインと実施・報告』ミルネヴァ書房

ワーチ, J. V.（2002）佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子（訳）『行為としての心』北大路書房

Block, D.（1996）. Not so fast: Some thoughts on theory culling, relativism, accepted findings and the heart and soul of SLA. *Applied linguistics, 17*（1）, 63-83.

Block, D.（2003）. *The social turn in second language acquisition*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Block, D.（2007）. The rise of identity in SLA research, post Firth and Wagner（1997）. *The Modern Language Journal*, *91*（s1）, 863-876.

Burkitt, I.（1998）. The death and rebirth of the author: the Bakhtin circle and Bourdieu on individuality, language and revolution. In M. H. Bell & M. Gardiner（Eds.）, *Bakhtin and the human sciences*（pp.163-180）. London: Sage.

Firth, A., & Wagner, J. (1997). On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *The Modern Language Journal, 81* (3), 285-300.

Gamoran, A. (1990). Civil religion in American schools. *Sociological Analysis, 51* (3), 235-256.

Hall, J. K. (1995). (Re) creating our worlds with words: A sociohistorical perspective of face-to-face interaction. *Applied Linguistics*, *16* (2), 206-232.

Kramsch, C. (1993). *Context and culture in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.

Kramsch, C. (2009). *The multilingual subject: What foreign language learners say about their experience and why it matters*. Oxford: Oxford University Press.

Lantolf, J. P. (1996). SLA theory building: "Letting all the flowers bloom!". *Language Learning*, *46* (4), 713-749.

Pavlenko, A. (2001). "How am I to become a woman in an American vein?" Transformations of gender performance in second language learning. In Pavlenko, A., Blackledge, A., Piller, I. & Teutsch-Dwyer, M. (Eds.), *Multilingualism, second language learning, and gender* (pp.133-174). New York: Mouton de Gruyter.

Pavlenko, A., & Blackledge, A. (2004). Introduction: New theoretical approaches to the study of negotiation of identities in multilingual contexts. In Pavlenko, A. & Blackledge, A. (Eds.), *Negotiation of identities in multilingual contexts* (pp.1-33). Clevedon: Multilingual Matters.

Van Lier, L. (1994). Forks and hope: Pursuing understanding in different ways. *Applied Linguistics*, *15* (3), 328-346.

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Cole, M., John-Steiner, V., Scribner, S. and Souberman, E. (Eds.). Cambridge, MA: Harvard University Press.

Zuengler, J., & Miller, E. R. (2006). Cognitive and sociocultural perspectives: Two parallel SLA worlds? *TESOL Quarterly*, *40* (1), 35-58.

（博士後期課程学生）

（2016年8月17日受付）
（2016年10月11日修正版受付）
（2016年11月16日掲載決定）